

福祉のひろば 5

2015

トピックス 児童福祉シリーズ



特集

震災後5年目を迎えた
ふくしま みやぎ いわて

喜多方市・郡山市・南相馬市・福島市・角田市・仙台市・名取市・塩竈市・
陸前高田市・宮古市

編集 総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

〒601-8382

京都市南区吉祥院石原上川原町21
<http://www.create-k.co.jp>

クリエイツかもがわ



TEL 075 (661) 5741
FAX 075 (693) 6605
送料何冊でも240円

●どう取り組んだらいいか迷っている職員・家族の皆さんへ

**生活をゆたかにする
性教育** 障がいのある人たちがとつくる
こころとからだの学習

千住真理子◆著 伊藤修毅◆編

1500円＋税

子どもたち・青年たちは自分や異性のこころとからだについて学びたいと思っている。障がいのある人たちの性教育の具体的な取り組み方を、実践例と学びの意義をまじえて、テーマごとに取り上げる。



楽しく生きる

藤野高明◆著

序文◆柳田邦男氏

楽しく
生きる
たちまち
増刷!

不自由さをかかえながらも、点字を得て希望を取り戻し、教師として教育や福祉の現場で活躍・両手・両眼を失った二重の障害とともに生きる著者のこころは、立ち止まってみる。1500円＋税

●「自我心理学」12の自我機能で学ぶ、認知症ケアの奥義・手引き！

**認知症ケアの
自我心理学入門**



ジェーン・キャツシユ
ビルギッタ・サンデル◆著 訓覇法子◆訳
2000円＋税

認知症の人の理解と支援のあり方を、単なる技法ではなく「自我心理学」の理論に裏づけられた支援の実践的な手引き、援助方法を高めていく理論の入門書。

付録
認知症ケアの
スーパー
ビジョン



いばしょ

震災後4年で7回居場所が変わった

—2015年3月 ふくしま・みやぎ・いわて取材から—

陸前高田市 村上^{よしろう}与四郎さん、フヨさん夫妻（ともに84歳）

陸前高田市市営の下和野^{しもわの}災害公営住宅（高田町120戸）に、昨年末に入居された村上さん夫妻を訪ねました。旧市役所の近くに住んでいたとき地震に遭い、全盲のフヨさんは、地震の片づけをしている与四郎さんに、「それはいつでもできる、今は逃げないと」と言って、2人で旧市役所に向かいました。「階段を駆け上がる途中で黒い津波が押し寄せてきた。なんとか屋上までのがれた。ヘリコプターでの救出は、綱がほどけそうになって、もうだめかと思った」と。避難所、県外の息子宅、仮設住宅に戻り、4年で7回居場所が変わりました。最後に一言、「もう疲れた」とおっしゃいました。

陸前高田市は、1000戸の災害公営住宅建設を計画。この住宅が最初に完成しました。



さとうはちろう
佐藤八郎さん（福島県生活と健康を守る会連合会会長、飯舘村村議会議員、飯舘村社会福祉協議会評議員）

飯舘^{いいたて}村は、森林が8割以上を占め、その除染は行われていません。汚染された土がトラックで、ビニールシート^{かぶ}を被せただけで移送されています。そんなことって、震災前は考えられません。被曝のさまざまな基準が、あまりにもひどく緩和され過ぎです。二度と故郷に戻れないと宣告されたらどうしますか？ 飯舘は三世代で暮らしていた家が多いのです。それが、家族離散になっている。飯舘は、地震そのものの被害より、目に見えない放射線の影響が大きいのです。そのため、県内の避難先で、飯舘から来たとは言えない現実があります。



ふるさと荒浜が大好きです

き だ き い ち あらはま
貴田喜一さん（荒浜再生を願う会代表、深沼海岸前の里海ロッジで撮影）

仙台の高見つねのり恒憲さん、高見のり子さん夫妻に案内していただき、3月11日、荒浜の小屋でお会いしました。願う会では、荒浜の清掃活動や自然を残そうととりくまれています。荒浜や蒲生がもう地域では、干潟の再生と共存する復興を目指すとりくみがあります。

昨年暮れに、高砂たかさご中学校の卒業生を中心とした高校生たちが、一年かけて作った蒲生の復興案を、宮城県と仙台市に提出しました。昼間の人口3300人の安全を考えたプランです。避難場所を防災公園にして整備する構想です。



まえかわけいいち
前川慧一さん（東日本大震災津波救援・復興岩手県民会議 代表世話人）

三月号まで連載を執筆されてきた前川さんに、現在お住まいの宮古市でお会いしました。宮古から釜石までの交通の便が悪く、凍えそうな夜に、バスの乗り換えのため、四〇分も吹きさらしの中で待ちます。中継所の「道の駅」も夕方には閉まるのでたいへん。前川さんは、釜石での被災と同時に、戦災の記録も残されています。重い体験を語っていただくのはたいへんだけれども、しっかりと残さないと、教訓が生かされず、また同じあやまちをおかすと。（なお、今回取材させていただいた方々に、神門やす子さんの書画をお渡ししました。）

（写真・文 下野祇園、四面写真は中島素美撮影）

【ひろばトーク】

障害のあるすべての人に「暮らしの場」の保障を 新井たかね 6

福祉のひろば

2015年5月号

●特集● 震災後5年目を迎えた ふくしま みやぎ いわて

福島県 喜多方市・郡山市・南相馬市・福島市	14
宮城県 角田市・仙台市・名取市・塩竈市	20
岩手県 陸前高田市・宮古市	27
座談会 ——福島市にて——	31

●トピックス● 児童福祉シリーズ

子どもが可能性を実現できる社会を	谷口由希子	40
子どもに「普通の生活」を	中島 素美	45
情緒障害児短期治療施設・鳥取こども学園希望館の挑戦		
公立保育園非正規職員調査に見る労働・生活・意識	垣内 国光	50
第21回社会福祉研究交流集会 in 埼玉		55

●連載●

フォーラム	福井 典子	58
全国で、沖縄のたたかいを 自らのたたかいとしていこう！		
相談室の窓から		
不登校・「ひきこもり」や障害のある人への支援のあり方	青木 道忠	60
育つ風景 保育園の卒園式を見直す	清水 玲子	62
「助けて！」って言ってもええねんで！		
子どもの貧困は親の貧困	徳丸ゆき子	64
全盲夫婦の出会いから 二人三脚のあゆみ		
子どもの頃の思い出 絹枝（1）	千田勝夫・絹枝	66
映画案内 『ローマの教室で～我らの佳き日々～』	吉村 英夫	68
現代の貧困を訪ねて		
生活保護費をプリペイドカードで支給する？	生田 武志	70
なにわ銭湯見聞録（25） 銭湯は絶滅危惧種	ラッキー植松	72
いただきます！	なかよしすみれ保育園	74
魚をおいしく、食べやすく！ あげぼの揚げ		
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
花咲け！男やもめ	川口モトコ	77

●表紙の絵●
神門やす子



●カット●
川本 浩

みんなのポスト 56 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81

●グラビア● 震災後4年で7回居場所が変わった

——2015年3月 ふくしま・みやぎ・いわて取材から——

障害のあるすべての人に 「暮らしの場」の保障を

障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会(障全協)
副会長

あらい
新井たかねさん

呼吸も上手にできず、いまにも命が尽きてしまうかと思った娘に、育ててほしいと願いを込めて「育代^{いくよ}」と名づけ、以来四三年をともに歩いてきました。

重症心身障害(以下、重心)と言われる娘はいま、「親が元気なうちに親から離れた暮らしの場を」「私だったら、こんな所に住みたい」と、願いと知恵と力を集めて作り上げた「障害者支援施設」で暮らしています。

近ごろ、呼吸に困難を抱えるようになり、呼吸補助装置をつけ、肺の中からのリハビリに取り組んでもらうことになりました。なぜつけるのか、装置はどんな物か、娘のような重心の方も、知的障害の重度の方もいますが、ともに暮らす仲間・職員全員へ「あたりまえのこと」として説明会が行われました。

説明が終わると、ミヤさんとマリコさんは育代のそばにきて、手を握りながら泣くのです。「心配ないよ。楽になるんだからね」と伝え、納得してくれたとき、二人の深い想いに「育代のかげがえのない家族が、ここにいる」と思えました。廊下で会ったノゾミさんは「いくよさんのこと、みまもりますからね」と言い、クロサワさんは私の手に「なおるといいね」と書いてくれました。人間味あふれる育代の家族たち。「この価値観を社会の価値観に！」とあらためて胸に刻む日となりました。

しかし、基礎構造改革のもとに進められてきた市場化の嵐のなかで、公的責任が音をたてるように崩されているうえに、福祉労働の地位が軽んじられていることからくる人材不足も重なり、娘たちの明日に不安と危機を抱く日々です。

さらに、「もうがんばれない」とメモを残して命を絶ってしまった親子、母親によって命を絶たれた青年、私のすぐ近くで起きてしまったできごとは、私の頭から離れるこ



あらい たかね

1946年、長野県諏訪八ヶ岳の麓ふもとに生まれる。諏訪二葉高校卒業後、特殊法人日本科学技術情報センターに就職。川口市市議会議員を経て、現在は社会福祉法人みぬま福祉会理事、および障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会副会長。

とがありません。

障全協は、障害のある人たちの生きる基盤となる「暮らしの場」の整備の重要性を共有しあい、厚労省との懇談も重ねてきました。「障害児者・家族の暮らしと健康の実態調査」にも取り組んできました。

調査用紙には、「一人では生きられない子どものことを思うと、心配で心配でしかたありません」「親に何か事が起きた時、どうなるのか考えない時はありません」「国は入所施設を作らず、地域移行と言いますが、利用できる資源がありません」など、「不安と心配でいっぱい」「不安ばかりが大きい」「不安な毎日を送っている」の記述が続きました。ひとこと「人生に疲れた」と書かれた八〇代の方もおられました。

障害者権利条約第二八条には、「相当な生活水準及び社会的な保障」として、住まいの保障の大切さが明記されています。家族の悲痛な叫びとの乖離かいりを、命がおびやかされ一歩も引けない実態を、国と政治は認識すべきです。障害者権利条約が指し示す「暮らしの場」が、障害のあるすべての人に用意されることを切実に願っています。

あたたかな人間関係のなかで築かれている育代たちの暮らしは、支援する職員とのあいだで積み上げられてきた信頼関係のうえにあります。一人ひとりの尊厳を守るために、人権意識を高め、感性や想像力をみがくことのできる労働環境・福祉労働の地位向上が喫緊きつぎんの課題であることも、強調したいです。

政治状況はあまりにひどい状況ですが、障害者権利条約を活用する力強い運動が、障害者・家族・関係するすべての人の力で進められることを、願ってやみません。



特集 震災後五年目を迎えた ふくしま みやぎ いわて

「津波が来たとき、みんなが あんぜんなところへ にげる目じるしに、ハナミズキのみちをつくってね」（文・浅沼ミキ子、絵・黒井健、絵本『ハナミズキのみち』から抜粋）

二〇一一年四月から正社員として就職が決まっていた浅沼さんの息子さんの葬儀は、就職予定の四月一日でした。息子さんは、二五歳でした。この絵本は、今回の取材で、陸前高田市の菅野悦雄さんから贈られたものです。

震災から五年目です。三月一〇日、私たちは仙台から二手に分かれ、宮城県角田市、福島県南相馬市と喜多方市、郡山市をたずね、福島市で合流。その後は合同取材です。一日は、宮城県名取市、仙台市（荒浜地域・蒲生地域）。二日は、塩竈市、石巻市、南三陸町、気仙沼市、そして岩手県陸前高田市。一日は、大船渡市、大槌町、釜石市、宮古市、普代村、野田村、久慈市。一日はふたたび福島市をたずね、話をうかがってきました。今回の取材では、震災から四年たった今をどのように思われているかを、率直にうかがいました。ご協力いただいたみなさまに、感謝申し上げます。

今回の取材を通して、復興の軸足が何だったのか、何なのかが、いま大きく問われていることを目の当たりにしました。喜多方市で、社会福祉士の方々に集まっていたいて、お聞きしました。避難者の孤立を防ごうとしゃべり場を催した。しかし、浜通り（県沿岸部）や放射線量の高い地域からの避難者は、どこから来たのか同じ県内で